2008年（平成20年）
準備号
（1月1日）

# Road of the Peace
## 平和への道

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

## 「ＲＯＰ（Road of the Peace 平和への道）」創刊にあたって

このたび、渉外部（立正佼成会京都教会渉外部、宮地啓安部長）より広報誌を発行することにしました。

京都という土地柄に立地するため、当教会では他教団、他団体の方々と接する機会が多くあります。しかし、その出会いやふれあいについては、あまり多くを語られていないと思います。

そこで、渉外部のスタッフが中心となり、「法華経の教えによって人々の幸福を築く」との創立の精神に基づき、京都教会や本会が展開している取り組みについて紹介していこうということになりました。

会員はもちろんのこと、当教会とご縁のある方々に私たちのことを知っていただき、理解していただきたいと思っています。そして、人々を幸せにし、世の中を平和に導くために、共に考え、行動していただける方の輪を広げていきたいと考えています。

今年、本会は創立７０周年を迎えます。この記念すべき年に、私たちは創立の精神に立ち返り、創立者の願いである、『国民皆信仰』『世界平和実現』に向けて、精進することを確認していきたいと思います。

今後、みなさまからのご意見を伺いながら、本紙を２号、３号と積み重ね、本会の精神を広める一助になればと思っています。みなさまからのご支援をよろしくお願いいたします。

## 京都佼成議員懇話会発足

昨年１２月９日、京都教会において、１９名の府議会、市議会議員出席のもと、京都佼成議員懇話会（京都議員懇）の設立総会が開催された。

この会は、立正佼成会会員綱領と法華経観に基づく政治浄化の理念を学び、政治活動を通じて広く社会に貢献することを目的として設立された。

総会では、幹事長に植田府議（中京）、副幹事長に山本正府議（宇治）、幹事に林田市議（上京）、安孫子市議（中京）、橋村市議（伏見）を選出し、２ヶ月に１回の懇談会を実施し、研修、情報交換の場を設けることとした。

参加議員からは、この会は、超党派の会として、地域のため、人々の幸せのために協力しあえる場になると期待する意見も発表された。

総会後、議員と教会役員との懇親会が持たれ、活発な意見交流がなされた。

## 電力ダイエットで
## 地球温暖化ストップ

昨年１２月初旬、毎年恒例の新宗連主催の「電力ダイエット」に約３００人の協力を得て、実施された。結果は１年前と比較して、使用電力量が平均　　キロワット増えた。

毎年実施しているこの運動は、地球温暖化防止に向けて、身近なところから実践していくことで、その意識を高めようとするものである。

また、信仰者として「少欲知足」の精神を養い、「命を大切にする」心をはぐくもうとする側面も持っている。

このキャンペーン期間中だけでなく、常日頃から省エネへの取り組みをするとともに、家族の協力を得るための語り合いを通して、その輪を広げられることを期待するものである。

## 時事刻々

毎年恒例の「今年の漢字」、昨年（平成一九年）は『偽』だった。この文字を謹書された、清水寺の大西管主は、「憤り」を感じると述べられていた。

この十年の漢字を振り返ってみると、毒、末、金、戦、帰、虎、災、愛、命、そして今年の偽と続く。

シドニーオリンピックで日本選手が活躍した「金」、阪神が優勝して「虎」、愛・地球博の成功で「愛」といった明るい話題から選ばれた漢字もあるが、暗いイメージの方が多い。

文字は世相を表す。人々の心は世相の影響を受ける。できれば、世の中の動向に左右されることのない心の持ち主を目指したい。

庭野開祖は、普通の社会生活を営みながら、悩みや苦しみにとらわれない心境に近づいてゆく。この「人間完成」の教えが法華経だと説く。

# 諸宗教対話のコーナー

## 本会の諸宗教対話の取り組みについて

「仏教では、この世のすべての存在は網の目のようにつながり合っていて、それぞれがかけがえのないいのちの役割を担っていると見る。こうした仏教の見方に立てば、他の宗教を排斥するどころか、異なる宗教もそれぞれに人類の平和と幸福を願っているのだから、その共通の目標に向かって協力し合える。」この考えに基づき、庭野日敬開祖が半生をかけてその推進に尽力したのが宗教協力である。

「世界の人々と手をつなぎあい、平和な世界をつくる（平和世界の建設）」という願いから、本会は、宗教協力を基盤とした平和活動を使命と考え、宗教間の壁を超えた交流を積極的に行っている。

その中心となるのが、ＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）。1970 年、京都で第１回ＷＣＲＰが開かれ、主要宗教の指導者約 300 人が一堂に会し、歴史的な出会いを果たした。また、ＡＣＲＰ（アジア宗教者平和会議）の設立、ＩＡＲＦ（国際自由宗教連盟）への参加、「比叡山宗教サミット」や日中韓仏教交流会への協力など、本会は国際的な宗教協力の輪を広げてきた。

一方、国内においても、日宗連（日本宗教連盟）、新宗連（新日本宗教団体連合会）と連携し、国内の宗教者との対話を図り、相互の信頼と協力を図っている。アジア地域を中心とした植林や農業開発、国内の環境問題への取り組みなど草の根の運動を活発に行っている。

世界の諸問題を自分自身の問題として受けとめ、問題解決に尽力していくこと、この精神の広がりがあって、はじめて世界の平和が実現されることだろう。

# 私たちの平和活動コーナー

## 一食を捧げる運動

平成 19 年次「一食ユニセフ募金」の総額（平成 18 年 10 月 1 日から 19 年 10 月 31 日までに寄せられた募金の集計総額）8380 万 1764 円。この浄財は、ユニセフ（国連児童基金）を通じ、本会が指定した４カ国の教育事業に充てられる。

この募金を支えているのが、「一食を捧げる運動」だ。節食し献金をするという「一食を捧げる運動」は、運動の基本精神「同悲」「祈り」「布施」に支えられたものであり、実践者はその精神に照らして、自らの心を謙虚に省みることができる。

この運動では、飢餓や貧困など困難な状況に苦しむ人々のことを思い、月に数回の食事（一般会員は月２回、青年会員は毎週金曜日の昼食）を抜き、この食費分を献じている。

この運動は、青森県の「松緑神道大和山」初代教主、田澤康三郎師が毎月 18 日を「平和祈願の日」と定め、「一食を捧げ、一欲を節しよう」と提唱されたのが始まり。本会では 1974 年からこの運動を推進している。

世界各地の平和実現に向け独自のプログラムを展開するほか、ユニセフやＮＧＯ（非政府機関）などの国際組織、民間団体などを資金面で支援し、それらの団体との合同プログラムも実施している。2003 年度までに、延べ 1353 のプロジェクトに 91 億円を越える支援を行った。

（街頭募金に立つ青少年）

この運動は、いつでも、どこでも、だれでもが、いつまでも実践できる身近な平和活動として、国際的にも広く、高く評価されている。

開祖に学ぶ「平和への道」

## 「戦争のための危険より、平和のための危険を」

昭和５３年（1978 年）６月、庭野開祖は国連軍縮特別総会において、非政府機関（ＮＧＯ）代表として演説に立った。当時の米ソのトップであるカーター大統領とブレジネフ書記長に対し、『危険をおかしてまでも武装するより、むしろ平和のために危険をおかすべきである』と、軍縮運動を切望した。

立正佼成会を創立して４０年。一貫して法華経の精神に基づき、平和を追い求めてきた庭野開祖の信念に満ちた演説だった。

開祖は、「法華経」は「人間尊重」の教えであり、「人間完成」の教えであり、「人類平和」の教えであると説いている。

この開祖の考え方や世界平和への行動にかきたてたものは何か。平和への道をどのように示されたのか。今後、このコーナーで「開祖に学ぶ『平和への道』」を連載していく。

# 政治と宗教のコーナー

## 「政治浄化活動」について

政治は、人々の生活上に諸問題に対する最善の方途を決定し、実施していく上で、最も大きな力を持っている。しかし、政治は一部の人が行うものでなく、民主主義国家である日本では、国民一人ひとりが主権者だから、国の主人公として政治にかかわり、政治を正しい方向に導いていくのは国民である。

また、宗教も政治も人々の幸せや社会の安寧を願うという点では同じ目的を持っている。だから、両者が車の両輪として協力していくことが平和な社会の建設に不可欠である。

個人の幸福も家庭の和も、現代社会においては、政治をよくしていく活動とともにあるからという考えから、庭野開祖は『政治浄化』『大衆教化』の二大眼目を掲げてきた。

しかし、宗教が政治権力と結託することは宗教の腐敗、堕落を意味する。そこで本会は「信教の自由」と、「政教分離の原則」を守ることを大原則として、政治・選挙へ積極的に参加して政治家に働きかけ、さらに政治に対する正しい世論づくりを進めながら政治浄化活動を展開している。

正しい世論づくりは、人づくりと無関係ではない。地域エゴや集団エゴに基づいて行動するような人ばかりなら、政治家もエゴの集団となり、国民全体、世界全体を考えての政治は行われなくなる。また、政治に無関心で、選挙に棄権する人が多ければ、政治家は国民の声など全く聞く耳を待たなくなるだろう。正しい政治意識を持つ人が増えなければ、政治は決してよくならない。ゆえに、「政治浄化」はむしろ、国民一人ひとりの政治に対する考え方や姿勢を浄化していくもので、その中心的な役割を宗教が果たしていくものと考えている。

# 仏教経営学入門～仕事に生かす仏の教え～

このコーナーでは、本会が実施している企業経営管理者研修から、企業経営に役立ててもらいたい教えを掲載するものである。

今回は、企業経営に関する庭野日鑛会長の法話を取り上げる。

■宗教の必要性

(1)人間には解決できないことがある

より豊かな生活が求められるなかで、科学の進歩が物質至上主義という考え方を生み出した。しかし、どんなに経済的に恵まれ社会的に高い地位を得たとしても、老いや病気、死など人間にはどうしても解決できない問題がる。

(2)宗教の必要性

物質文明は、人間の生活を豊かにする上で大切な条件であるが、個々が抱える問題や、悩みそのものなど根本的な問題に対処するところに、宗教の必要性がある。

(3)共生思想

現在、人類は環境破壊や地球の砂漠化、人口の爆発的な増加に伴う食料問題など、地球レベルで考えなくてはならない問題に直面している。人間だけでなく地球全体を視野にとらえた「共生」という考え方が注目されはじめている。

(4)共生思想は仏教

この「共に生きる」という考え方こそ、仏教の根本思想。人類を救い宇宙を救う教え、２５００年前に釈尊によって悟られた仏教の教えの中に、その答えがすべて説かれている。

(5)これからの宗教

世界の宗教家たちも、宗教のあり方を研究していくなかで、仏教のなかに真の救いを求めはじめている。

校成会ミニ知識

## 「心田を耕す」について

お釈迦さまの逸話につぎのような話がある。

大地主のバラモン、バーラドバージャが、釈尊に「私たちは田を耕し、種を播（ま）いて、食を得ている。あなたも自ら田を耕し、食を得たらどうだ。」と非難するように言った。

「私もまた（人の心を）耕し、種を播き、そのの ちに食を得ている。」と、お釈迦さまは答えた。

この言葉にあるように、よりよい生活、平和な社会……人間が生きる理想を追い求めるとき、それを行なう一人ひとりが、心の田をやわらかく耕すこと、これを本会の目標として掲げている。

# 家庭や地域社会を元気にするコーナー

## 「明るい社会づくり運動」について

「明るい社会づくり運動」は提唱者である庭野開祖の「自らの生き方を正し、社会を明るくしようという志を同じくし、“社会の一隅を照らす人”を一人でも多くつくろう」という理念のもとに、「全人類が人間本来の姿に返り、本質的に目覚める」ことを究極の目的として始まった。この呼びかけに賛同する人々が、地域から「善意の心を呼び起こし、真の人間性を開発していこう」と奉仕活動や社会活動、さらには平和活動などの行動を起こしていった。その輪が全国に広がっていったものが現在の「明るい社会づくり運動」である。そして、地域の福祉や平和のために活躍している諸団体と連携して最も身近で緊急の問題に取り組み、都道府県や市町村の実施する事業や催しに協力することで、地域社会ばかりでなく行政側からも多大な評価を得てきた。

現代社会では、凶悪犯罪の多発、青少年や高齢者の自殺問題、家庭崩壊やいじめなどマスコミをにぎわしている問題は数え上げたらきりがない。これは身近なところで起こっている問題にもかかわらず、ややもすると直接自分の身に降りかかってこない限り「自分の問題」として受けとめようとはしないものだ。

社会問題と自分を分け隔ててしまう感覚の背景には「自分さえよければいい」という利己的な考え、あるいは「自分一人が何かをしても、世の中はそうそう変わるものではない」という無力感や虚無感などがあると考えられる。しかし、仏教では、人々はだれ一人として社会から孤立して存在しているのではないと教えている（縁起の法則）。お互いに関連し合って生きていることをはっきりと認識できた時、はじめて、社会で起こっている問題の解決が見えてくる。

人々の幸せを実現するために、このような考え方によって展開される「明るい社会づくり運動」の国民運動化が期待されている。

## 子供に学ぶ家庭教育のすすめ

明るい社会を築き、世界の平和を実現するためには、家庭において青少年の豊かな人間性を育てることが不可欠だ。東京家庭教育研究所では、親の日常生活の姿を通して、親子共々に向上していく「家庭共育」を目指して、その普及に努めている。

子供を変えようと思うならば、まず親が変わらなければならない。子供が変わらないということは親が変わらない証拠である。ここに「親が変われば、子供が変わる」「子供に学ぶ家庭教育」という理念の下に展開されている。

昨今の特に「家庭のあり方」が問われている。「生活の中での親と子のふれあい」を通して、よりよき家庭づくりが求められている。

## 社会福祉

少子高齢社会の時代を見据え、本会では1972（昭和47）年から仏教福祉の研究開発に努め、地域の福祉に貢献できる人材を育成してきた。

その数は約3000人にも及び、全国各地で高齢者の介護などボランティア活動に励んでいる。1999（平成11）年からは社会福祉活動に不可欠な知識や技術を習得した専門のスタッフを全国各教会に配置。「心の救い」と共に現実的な諸問題に対応する活動を展開している。

京都においても、高齢化社会の到来とともに、この専門スタッフとともに家庭や地域における取り組みを推進している。

## 渉外部からのメッセージ

渉外部というと、会員さんからは、何をしているところか分からない面が多いと思います。対外的な活動が中心になるため、どうしても、情報を提供する機会があまりありません。

一方、私たちとご縁のある方々であっても、限られた接点でしかなく、本会の考え方や活動について、十分お伝えできているとは言えません。

そこで、各方面で取り組んでいる渉外部のスタッフとともに、自分たちが学んだことを、みなさんに発信できるようにしようということで、この新聞を発行することにしました。

なにぶん素人集団ですので、内容や表現に不適切なところも多々あろうと思いますが、回を重ねるたびにだんだん良くなる（法華の太鼓）ようにしていきたいと考えています。みなさま方からのご指導・ご意見をいただき、よりよいものにしていきたいと思います。